

日本地衣学会

No.33

ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次 雑報.....	113
雲南地衣類調査行(その2)/原田 浩.....	113

雑報 Miscellanea

雲南地衣類調査行 2003 (その2)

今回はやっと地図(図1)が用意できたので、前回の場所も地図上でちょっと紹介しておこう。太目のまだら

の線で示したのがルート(カラーならピンクに見える)。到着した昆明から一気に雲南の西端近くに移動し、怒江沿いに北上し、貢山周辺で調査した。まずの地点で、山道の真ん中の大石で立ち往生、では怒江(サルウィン川)の水

系から更に西の独龍江への道の峠附近の小さな滝が舞台だった。そして、今回の話題は から。

* * *



図1. 調査ルート。
雲南省の北半分を
巡った。

— 国境・省界
調査ルート



図2．六庫から片馬への峠を越えた．密林が広がる．つい最近までトラがいたのだとか．

六庫（リウクウ）の少し北で怒江沿いの幹線から西に折れ、ミャンマー方面に飛び出した地、片馬（ピアンマ； ）に向かう．標高 3000m 超の峠を越え、間もなくの地点で調査となる．道路がぬかるんでいた．インド亜大陸がユーラシアプレートに沈み込んだ縁の近くのため、激しい地殻変動が起こり、岩質がもろくなっているなどと勝手に納得していた．

急斜面に小さな滝があったが、泥が堆積し、冷たい水流の縁にはアナイボゴケの仲間が見当たらない．しかし意外なところにそれはあった．滝のすぐ脇の、水が染み出ている場所にウバミソウ（？）のような草本が密生していて、これをかき分けると、その根元の小石にたくさん生えているではないか．

このあたりにはシャクナゲの仲間の高木など多く、先に見た貢山から独龍江へ向かう峠近く（標高は同じくらいだが）とも全く違った植生のようなだった（図2）．いつも霧がかかるような場所であり、蘚苔類の着生がすごく、Mossy Forest の様相を呈していた．大型の地衣類の着生は認められなかったが、時間をかけて小型種の調

査をしたいものだったと思った．残念ながら今回はテーマも違うし、時間切れである（本日も長距離移動＋足止めのため遅い時間になってしまった）．

白馬雪山再び

六庫を後にし、大理（ダーリ）・麗江（リジャン）を経て、香格里拉（シャングリラ）へ（貢山と香格里拉は直線距離では 100km 程だが、間にある山脈を越える車道がないため、約 1000km も迂回しないと行けないのだ）．香格里拉の地名は前回も紹介したが、ここはもとは中甸（ジュンディアン）と呼ぶ町だったのだが、つい最近、観光で売り出すため名称を変えたいらしい．

香格里拉からは、更に北西に進むと白馬雪山（バイマシュエシャン）の峠に至る．標高約 4300m．94 年にも調査で訪れた地だった．峠のすぐ西側に小さな流れがあり、そこをわずかに遡り調査をする．流れの縁の岩には様々な地衣類が生え、これを採集するには骨が折れた．ハンマーとタガネを使って、基物の岩ごと採取するが、何しろ標高が高いので息も絶え絶えになり、酸素不

足を実感する。そういえば、前回は峠の反対側の岩場で同じように苦しんだ鮮明な記憶が残っている。

峠を越えた徳欽(ドゥチン)で一泊(その日は中秋で、ホテルは遅くまでお祭り騒ぎだった)した後、昨日の苦行の水辺と峠を過ぎ、少し下った地点の小さな沢の周囲で再び調査。・・・そのとき撮った写真(図3)の被写体は、私が今回どうしても見たかったものだった。ナヨナヨサガリゴケ属 *Lethariella* の仲間 [*L. cashmerina* Krog か *L. sernanderi* (Mot.) Obermayer と思われる] で和名なし。雲南では鹿心茶あるいは紅雪茶との名で知られる。昨年あたりダイエット効果で一時的有名になった雪茶(=ムシゴケ *Thamnolia vermicularis*)と同じように、中国茶の入れ方で飲むものだ(もっとも、こちらについてはダイエット効果があるとは聞いていない)。王さんによると、白馬雪山周辺では比較的普通に見られ、ビャクシン属などの針葉樹の上に多いのだという。自動車の上からは何度か見たのだが、いずれも木の高い所だったりで、間近に見る機会はなかったが、とうとうこうして出会えることができた。・・・因みに、出発前の9月2日には、王さんの研究室で試飲してみた。湯飲みにこの地衣をいっぱい入れ、熱湯を注ぐと、濃い赤紫色の液体となる(図4)。とても苦くて、お世辞にもおいしいという代物ではなかった。もっと地衣の分量を少なくすれば何とかなるか!?

カシにナガサルオガセ

香格里拉から今度は北北東方面に直線距離で約100 kmの大雪山(ダーシュエシャン)である。幹線道路をもう少し進めば峠となり、その先は四川省というところまで来て、脇道にそれた。橋のない川を渡り、ランドクルーザーが通ると道幅いっぱいになる山道を、ちょっとひやひやしながら進み、間も



図3. *Lethariella* sp. 針葉樹の倒木の上に生えていた。



図4. *Lethariella* 茶を飲む。深い紅紫の色合いが印象的だ。この“茶”について時に誤った記述が見られるが、詳しくは次の論文を参照されたい: Wang L.-S., Narui T., Harada H., Culbertson C.F. & W.L. Culbertson. 2001. Ethnic uses of lichens in Yunnan, China. *Bryologist* 104(3): 345-349.

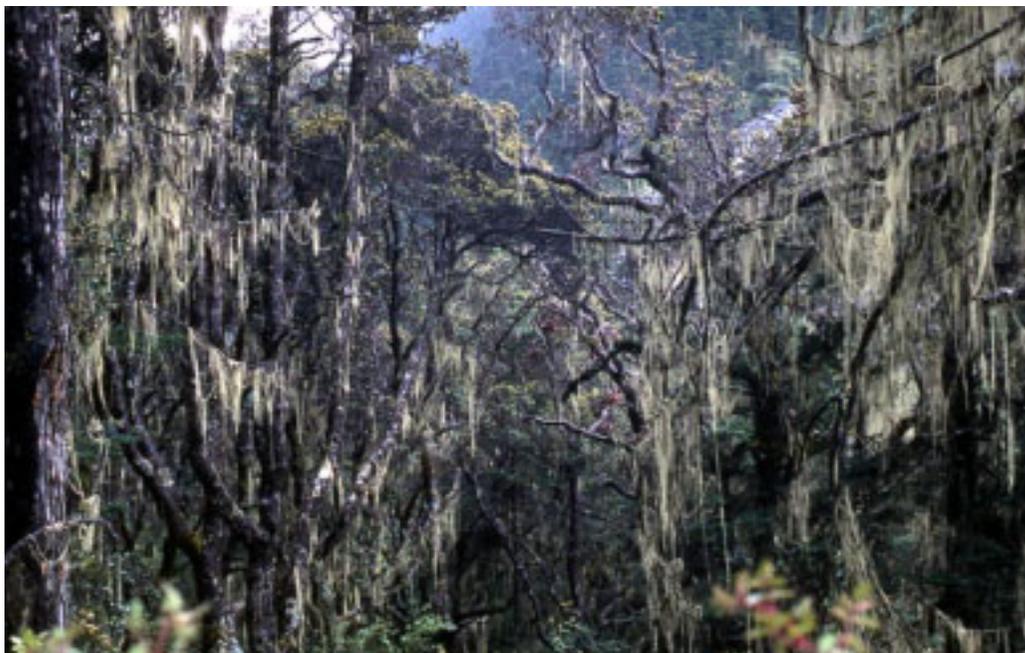


図5 .常緑広葉樹の枝からナガサルオガセ *Usnea longissima* が下がる .本種が日本では亜高山帯の針葉樹林を代表する地衣類であることを当たり前のように思う著者には、雲南のこの風景はエキゾチックに映った .

なく四川省というところまで至る .カシと針葉樹が混じる森林に、カプトゴケ属やヨロイゴケ属、アオキノリ属などの大形葉状地衣の着生が見事な林だった .亜高山帯の針葉樹から垂れ下がる日本のナガサルオガセの姿に慣れている私の目には、カシの木から垂れ下がる様子はとても新鮮に映った(図5)この調査が淡水生アナイボゴケ科の調査だったら何日か滞在したいよう

な場所だったその日は夜遅くなり香格里拉に到着し、疲れを癒した .明日は再び金沙江(チンシャジャン)を渡り(その前にひどいぬかるんだ道が待っていたが)、剣川(ジェンチュアン)という町までの移動が待っている .王さんによれば、淡水生地衣類の調査には特別お勧めのスポットだという .(つづく)

(原田浩: 千葉県立中央博物館)

Lichenology 日本地衣学会ニュースレター

とも、投稿先は:

原田 浩 . 〒260-8682千葉県市中央区青葉町955-2
千葉県立中央博物館 . Fax 043-266-2481.
E-mail: h.hrd3@mc.pref.chiba.jp

(原田浩: 編集委員長)

複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、許諾を受けてください . 詳細は本誌31号110ページに .

Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication,

you or your organization must obtain permission. For details, see no. 31, p. 110 of this publication.

日本地衣学会ニュースレター 33号

発行日: 2004年 3月10日

編集: 原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄
発行者・発行所: 日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内
